

## 新架蔵『能間』について

関屋俊彦

はじめに

まず、入手のいきさつを述べる。古書目録通巻第十九号『書肆つづらや新収書目』（平成二十八年二月）に「和泉流「能間」七冊」とあるのを見付けて小躍りした。解題には次のようになり学識のある方の考察があった。

「大正初年頃に和泉流狂言師が間狂言本全十巻（推定約三百番収録）の本文と書入れを書写し、昭和初期にかけて自らも朱筆を入れるなどし継続的に増補した書入れ本のうち泣別三冊を除く巻二・三・四・五・八・九・十の七冊。計二百十五番を曲名のいろは順に収載している。朽葉色表紙の中央題簽に外題「能間」といろは別収録部を墨書、半紙本二三五×一六〇mm、片面一〇行書、計五六八丁墨付。本文では時に曲の冒頭で出立を、

謡い所や舞い所では付を、末には他役との関係や口伝など添え記すこともある。朱筆ではまずワキなど他役のセリフを書き添え、演出上の留意点や他役の流儀に応じた相違点、替や口伝、セリフ細部の変更、「先生」からの間書き等々記録分量が多く、中には東京華族会館天覧御能の装束付をはじめ当時の上演記事も見られる。口伝に関して「朝長懺法ノ習の事」や石橋の替間（大正五年付けの書写識語がある綴込み一葉と、挟み込み一葉の二種）などいくつかまとまった記事があるが、分量的にみて最も目を引くのは道成寺の鐘釣作法で、これを含む本文全体は12丁にわたり、末に親本にあった「此筆ハ金春太夫勤し時相手したるもの也」の一文がみられる。この道成寺本文にも朱筆が入り、その末には「小鼓披キ候節観世元滋の道成寺の時 間つとむ 野村家書物照り合せ朱書を加ふ」とある。

## 一、書誌

古書目録にも記されていることながら改めて書誌事項を記す。

○数字は仮のものである。

袋綴。楮紙七冊(全十冊)。茶表紙二三五×一五九mm。上部

貼題簽八一×一〇四mm。

朱入。節記号詳細。

小口書き：「二」とちりぬ」等

丁数：①「とちりぬ」の部 ……墨付八十三丁・遊紙二丁。

②「をわか」の部 ……墨付九十二丁・遊紙二丁。

③「よた」の部 ……墨付九十二丁・遊紙二丁。

④「そつねならむう」の部…墨付八十七丁・遊紙二丁。

⑤「あさきゆ」の部 ……墨付九十四丁・遊紙二丁。

⑥「ゆめし」の部 ……墨付五十六丁・遊紙二丁。

⑦「ひもせず」の部 ……墨付六十五丁・遊紙二丁。

## 二、解題

次に各冊の簡略な解題を記し、本書の性格が明確に現される

箇所を特記抜書きし、関連する資料を\*でもって記した。頁番号は各頁と各目録に朱書されているものである。

### 【凡例】

一、新字体を使用したが一部份旧新字体のままとした。異体字は通行の字体に直した。

一、朱・青ペン・鉛筆書の箇所もあるが区別はしていない。

一、節記号・ミセケチはとっていない。

一、読点に統一し任意にうった。

### 【各冊解題】

①「能間 登知 利ぬ 之部」

目録	一	二	三	四	五	六	七	八	九
東方朔	道明寺								朝長
巴	知章								東北
木賊	道成寺								藤永
唐船	東岸居士								融
當願暮頭	虎送								鳥追船
竹生嶋	張良								調伏曾我
千引	輪藏								龍頭太夫
龍虎	呂后								鶴
濡衣									

〔特記〕

〔朝長〕

「朝長懺法ノ習の事 懺法となり候得ば、第一太鼓の大習にて、尤、一子相伝なり、段々大小笛残らす秘事ある事と知べし、大正七年十一月廿四日、故鬼頭八郎翁追善ノ時、鬼頭為太郎氏へ特別ニ太鼓済シ候故、シテハ観世元義氏ニテ、脇ハ大阪の中村弥三郎氏ニテ、間ハ鍵三郎相勤む、左ニ師匠家より相伝のケ所を記し置（最初、脇所の前をよひ出事、常の通り、鍵三郎曰、せん法の聞書ハ別々とし込、六義の中々有る故ニ見合わせ、よく研究して努むべし、尤、師家より皆伝の者ならでハ務むべからず、」

「鍵三郎曰、脇ニ語りなき故、長く語れとのあいさつあれバ長く語る考なりしも、別ニ沙汰なき故ニ狂言ハ短く語るが習故ニ短く語りたる也、」

「中村弥三郎ハ番組ニ大悟の小書無き故ニ語らぬと云〇元義ハせん法と小書あれハ脇の語ハ無論有もの故、語れと云」

\*倉田義弘編『大正の能楽』（平成十年・日本芸術文化振興会）

によれば「新愛知新聞」十一月九日の記事に「追善能楽会 故鬼頭八郎翁追福の爲め、観世宗家一行並に太鼓家元観世元規翁父子を聘し、本月二十四日午前九時から東区呉服町能楽堂

に於て追善能楽会を催す。」とあるのに合致し、能組は「名古屋新聞」からだか、観世元滋の（翁）付五番立で〈朝長〉懺法はシテ観世元義・ワキ中村弥三郎・大鼓谷口喜三郎・小鼓田鍋惣太郎・太鼓鬼頭為太郎・笛藤田栄三郎である。

「鍵三郎」と明記してあるのがこの間狂言本の筆者のようで、和泉流狂言方河村鍵三郎のことで、名古屋の狂言共同社の一員である。『現代音楽大観』（昭和二年・日本名鑑協会）に顔写真入りで詳しく紹介されている。ちなみに『現代音楽大観』は筆者が国内研修の折、神田の古書市で見付け、しばらく法政大学能楽研究所の棚に置いていたが、その後、大事な資料であることがわかり、現在では複製本として出版されている。

〈道成寺〉A

「此次第書ハ脇春藤流、宮城甚兵衛勤シトキ也、シテハ宝生流乎、」

「一、此書ハ金春大夫勤し時、相手したるもの也、

〈道成寺〉B

「一、此書ハ金春大夫勤し時、相手したるもの也、（以下、朱書）鍵三郎曰、朱書をかへたるハ大正四年五月三十日、小鼓開キ催、田鍋宗太郎催の節、観世宗家観世元滋氏の道成寺の時、間河村鍵三郎、河村保之助つとむ、野村家書物と照り合

せ朱書を加ふ、昭和六年十一月十五日、田鍋惣一郎、小鼓披シヲ、金剛巖、間丘造、壮次、勤ム、金剛流ハ金春ト同様、シテ案内ヲ乞、烏帽子モ渡ス、

\*古書目録解題にあるように長大なものである。しかもA B二か所に分けて書かれているのは、Bの本文にあるようにシテが金春流の場合である。

Aの宮城甚兵衛は『名古屋市史』によれば「金春流協師春藤六右衛門の門人にして、藤堂家に仕ふ。」とあり、特に三世甚兵衛は宝暦三年の藩祖宗睦長子治林の誕生祝いや、同十三年宗睦家督祝いに〈道成寺〉を勤めているとの特記がある。

Bの大正四年五月三十日の能組は倉田義弘編『大正の能楽』五月二日にある「名古屋新聞」の記事「大能楽会 当地小鼓の名人たる田鍋惣太郎氏は今回道成寺(乱拍子) ひらきを期とし、来る二十九、三十の両日、呉服町能楽倶楽部に於て大能楽を催すよし」に合致し、二日目の〈道成寺〉は観世元滋の翁・ワキ宝生新で間として河村鍵三郎と河村保之助両名の名が挙がる。これは寛鋳一・飯塚恵理人編『近代名古屋の能楽を支えた人々(一)』(平成十三年・東海能楽研究会)でも取り上げられている。

〔藤永〕

「大正四年六月十三日、名古屋能楽会、第七期、第三回目ノ時、寺田左門治先生、藤永をつとめる、鍵三郎、能力を付申合七、左二」

②「能間 を わ か」

目録

老松 一 大杜 二様有り 神子神主トモ

小塩 一〇 大原御幸 一六 女郎花 一七

大江山 二一 大蛇 二五 音城寺 二七

隠岐物狂 二九 落葉 三〇 苧玉卷 三一

大木 三式 和田酒盛 三三 合甫 三七

邯鄲 三九 加茂 四一 春日龍神 四五

感陽宮 五一 兼平 五七 葛城 五七

鉄輪 六二 葛城天狗 六三 鏡御裳濯 六六

巖洞 六八 兼元 六九 加茂物狂 七一

高野物狂 七二 高野敦盛 七三 河原太郎 七四

刈萱 七六 河水 七九 葛城加茂 八二

笠卒都婆 八四 刀 八七 花月 八九

\*別紙印刷「三段の舞 型付」二枚あり。

③「能間 與多之部」

目録					
養老	一	頼政	四	吉野天人	九
楊貴妃	一一	吉野靜	一二	弱法師	一四
芳野	一五	吉水	一八	横山	一九
夜討曾我	二〇	高砂	二三	玉の井	二六
田村	三〇	忠度	三四	龍田	三九
玉葛	四三	壇風	四七	大仏供養	五一
竹の雪	五二	當麻	五六	大會	六一
泰山府君	六八	丹後物狂	七一	大般若	七一
建尾 菊池共	七五	太刀堀	七七	高安	七八
陀羅尼落葉	八〇	七夕	八二	武文	八三
湛海	八八	第六天	九〇		
④「能間 そつねならむうの部」					
目録					
双紙洗	一	空腹	式	鶴亀	三
土車	四	土蜘蛛	五	鶴若	一一
鼓瀧	一二	寢覚	一四	難波	一六
啼不動	二〇	羅生門	二三	雷電	二六
六浦	三〇	梅枝	三四	室君	三七
村山	三八	右近	三九	浮舟	四四

采女 四七 雲林院 五一 雨月 五六

鳥頭 五九 鶉飼 六〇 鶉祭 六五

鶉羽 六七 空蟬 七一 植田 七三

浦嶋 七四 野宮 七三 野守 八〇

野口 八四

〔土車〕

〔此応答習トス〕

〔雷電〕

「大正四年二月廿一日能楽会ノ時、喜多六平太ノ息実氏勤められし時ハ、前シテ走込ニテ間語ハ無シ、」

\*倉田義弘編『大正の能楽』『名古屋新聞』二月五日の記事に

「能楽会 名古屋能楽会にては来二十一日午前九時より、市内

東区呉服町能楽俱樂部に於て開催」とあり「雷電（喜多実、西村瀧六）」と記す。

〔右近〕

「宝生流、乱序ニて出る、他流ハ不用、」

「高安流、申合セ二日おりの日の事なしニ語る、」

⑤「能間 あさ きゆ」

目録					
嵐山	一	淡路	四	敦盛	八

綾鼓 一三 芦刈 一五 葵の上 二五

阿漕 一九 愛染川 二三 海人 二五

熱田 三〇 朝顔 三三 愛寿 三四

悪源太 三六 赤沢曾我 三九 愛宕空也 四一

安宅 四三 佐保山 四六 鷲 五〇

実盛 五一 西行桜 五五 三笑 五八

犀 五九 佐々木 六二 在世太子 六五

貞任 六八 斉藤五 七一 逆鋒 七三

金札 七四 切兼曾我 七七 木曾願書 七八

清重 七九 北野物狂 八〇 貴船 八一

弓八幡 八二 夕顔 八六 遊行柳 八八

行家 九三

きぬた(別二とじ込の内ニあり、委細は別とじニあり、砧 最後)に別とじより写して書込あり)

〈海人〉

\*別記一枚あり。

〈三笑〉

「宝生流ニテハ口明有之内。外ノ流義ニハ口明ナシニ仕来候

処。金三郎を頼、口明書写勤ル、」

〈佐々木〉

「金春流」

〈在世太子〉

「後ノ官人別ノ者也、宝生ハ乱序ナシ、金春ニハ乱序有也、」

⑥「能間 めみし」

目録 和布刈 壹 三輪 四 通盛 七

三井寺 一式 三山 十四 御裳裾 一八

身壳 二二 水無瀬 二三 水無月祓 二四

志賀 二五 白鬚 二八 自然居士 三〇

俊成忠則 三一 春栄 三式 俊寛 三四

照君 三五 正尊 三八 石橋 三九

舍利 四一 鐘馗 四五 檜塚 四八

信夫 四九 書写 五一 志賀忠度 五三

獅子 五六

〈三井寺〉

「三井寺へ御参詣有ふするにて候、観世流ハ是迄なり、桶取り

持チテ入、ウシロニ付テ回り、太鼓座より切り戸ニ入、」

「観世流ハ鐘三ツ突捨て常座ニ付、此時ハ籠太鼓同様、ホ、一

ツ突スタグシタ、あすのたしに致さふと云て座ニ付、」

「宝生流ハ目付柱の角ニ図の如く鐘ある故ニ〇印の所ニ立て突

」

くべし、(図略)」

〈俊成忠度〉

「保生流ニハ此応答なし、」

〈俊寛〉

「脇観世流ニは前ニ共をつれず、」

〈照君〉

「唐人出立、金春ニハ乱序也、宝生ハ乱序ナシ、太コ座へ出て居テ、中人ニ立、」

〈石橋〉

「○観世流ハ童子ナル故、山ガツノスガタヲ童子のすかたと云べし、

観世流二人間、観世流ハ乱序無き故に、元来、間ハ当流ニ無之候得共、近来、間をする事ニ成シ故ニ、一声ニテ一ノ松へ出、別紙の出羽謡をうとふ事ニするなり、但、大小アイライ、謡出スト止メ、」

〈石橋替間老人〉「中井製」便箋。奥書「大正五年四月末 野村信英写之」。ほかに別紙「石橋替間」一枚あり。

\*この部分だけ別筆の綴込み「中井製」とある青原稿箋で野村信英の自筆である。信英とは野村又三郎家十一世。慶応元年(一八六五)〜昭和二十年(一九四五)。拙著『狂言史の基礎

的研究』(和泉書院)等参照。『能楽大事典』(筑摩書房)の

「河村鍵三郎」の項目に「野村又三郎家のバトロンの存在で、

一一世又三郎信英の後見をもって任じていた。」の記述とも合

致する。

⑦「能間 ひも せず」

目録

氷室	巻	百万	六	桧垣	八
雲雀山	一〇	飛雲	一三	常陸帯	一六
比良	一九	廣元	二巻	羊	二二
七騎落	二三	盛久	二四	求塚	二七
望月	三〇	紅葉狩	三三	守屋	三七
文学	三八	西王母	三九	是界	四二
誓願寺	四五	接待	五〇	蟬丸	五二
禪師曾我	五三	殺生石	五四	関原與巻	五八
正義世守	五九	住吉詣	六〇	須磨源氏	六一
鈴木					
〈氷室〉					

「委敷形付八家元大本(間応答巻ノ一)ニアリ、此本ハ角淵氏預り居ル故ニ取りヨセ見ルベシ、」

\*「家元」とは当然、野村又三郎家である。「角淵氏」とは『能

『樂大典』に「角淵宣」と立項する。弘化四年（一八四七）  
昭和十四年（一九三九）。狂言共同社同人。

〔百万〕

○観世ハ南無釈迦牟尼仏ヲ二度謡、釈迦くワ老度云テさは  
みさニナル、

○宝生ハ（南無釈迦牟尼仏、釈迦くくく、）（南無釈迦牟尼  
仏、釈迦くくく、）さはみさトナル、

右、二流の他ハよくく問合、勤むべし、

〔雲雀山〕

「大正六年五月廿二日、東京華族会館ニ於テ天覧御能の時、左  
ノ如キ装束ニテ、小早川、野村等ニテ相勤、其趣、野村先生  
より直勤ニより記す、（型付略）」

\*この日のことについては「華族会館行幸啓能」として池内信  
嘉著『能楽盛衰記』に詳しく記され、復刻・増補版が西野春  
雄氏解題によつて東京創元社から平成四年に出版されている。  
『大正の能楽』では「東京朝日新聞」を引用している。〔雲雀  
山〕のシテは観世元滋・ワキ宝生新で、問狂言は小早川精太  
郎のほかは犬曳が野村又三郎、勢子として藤江又喜・多々良  
外茂三・野村万介が出演している。まさに御下賜の初舞台で  
天皇・皇后同列の当時としては大変名誉な天覧能であった。

### 三、考察

以下、架蔵『能間』の特色を簡条書きにして述べてみる。

一、欠本の「一」は「いろはにはほへ」、「六」「七」は「のくやま  
けふこへて」であり、「れ」の部はない。なお、〔七騎落〕  
は「ひちきおち」で取っている。

一、ゴマ節は丁寧で、ワキなど相手方のセリフを簡単ながら朱  
書する。

一、河村鍵三郎（一八六三～一九四〇）が中心となつて狂言共  
同社の角淵宣（芸名「外堀新太郎・一八四七～一九三九」）  
等何人かの手が入っている。ちなみに狂言共同社のほかの  
（同人は井上菊次郎（一八四六～一九二〇）・伊勢門水（一八  
五九～一九三三）以外に没年未詳の田中庄太郎・三橋正太  
郎・山本久平の計七名によつて明治二十四年（一八九一）  
に設立された。

一、野村信英自筆原稿の「石橋替間」が綴じ込められているこ  
とからして野村又三郎家十一世信英を宗家としている。

## まとめと課題

和泉流の間狂言本で刊行されたものは『狂言集成』（昭和六年七月・春陽堂）くらいである。しかし、同書そのものの底本が、どうやら三宅藤九郎家七世庄市の弟子だった南大路維顕が所持していたもので『集成』にないものが多い。次の曲である。

〈虎送〉 〈千引〉 〈呂后〉 〈園城寺〉 〈加茂物狂〉 〈太刀堀〉  
〈空腹〉 〈赤沢曾我〉 〈北野物狂〉 〈志賀忠度〉 〈正義世守〉

次に当然、野村又三郎家の台本との比較が必要となるが、『国書総目録』によると「野村信喜間之本」（天保写）五冊が近いものと思われる。いずれ本書を翻刻した上で改めて調査したい。

（せきや としひこ／本学教授）